

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 熊木 俊朗

本論文の分析対象地域は、日本列島の北端部を含む環オホーツク海沿岸地域であり、考古資料の時間軸を設定する上で重要な土器型式編年に不備や空白が残されていたところである。申請者は、まったく新たな土器型式分析方法(「文様割りつけ原理と文様単位の分析」と、自らのアムール河口部での発掘調査を通しての新資料での分析等から、当該時期・地域の歴史叙述のための基礎的データを提供し、さらに当該地域のヒトや情報の動態について考察しており、完成度の高い研究である。

第Ⅰ部の続縄文土器編年では、道東北部の宇津内式と下田ノ沢式土器、道中部の後北式土器群を先の「文様割りつけ原理」で整理を行った。また道北端部からサハリンに分布する鈴谷式土器を扱い、続縄文土器群とオホーツク土器群の連続性／非連続性つまり南北交流が段階的に進行するプロセスを明らかにした。特に「文様割りつけ原理」の手法では、多数の土器型式間の構造的な同一／差異性が系統的に把握され、そこに存在する縦の系統関係と横の影響関係を明確にした。第Ⅱ部はオホーツク土器編年である。道北部編年の枠組とされてきた礼文町香深井A遺跡の土器編年を層位と型式のクロスチェックで再検討し、文様要素他の各属性の組み合わせパターンから属性を絞り込み、刺突文群→刻文Ⅰ群→刻文Ⅱ群→沈線文群という変遷を設定。その後、網走市モヨロ貝塚の未公開資料をも駆使して型式学的検討を加え型式変遷過程を提示した。道北部との対比では、両地域で系統が交錯するプロセスを整理し、さらに刻文土器群の検討をアムール河口部との比較等から地域差を設定し、その地域別ネットワークにヒトが取り込まれる形・規模を土器型式論で想定。最後にオホーツク土器の展開過程とその背景をまとめ、北海道の続縄文・擦文土器との編年対比も行い、オホーツク土器の成立・展開過程を明らかにし、広域編年対比を確立している。

本論文は、地域毎の編年と地域間の対比、土器の動きに表われた地域間交流様態の解明等、従来個別に行われてきたものを総括し、広域の環オホーツク海沿岸地域の土器編年を初めて確立した研究として高く評価できるものである。土器交渉とヒトの動態をもう少し追及して欲しかったが、現時点ではいかなる研究者もさらなる追及は困難と考えるので本論文の意義を損なうものではない。

以上より、本委員会は、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。